

題字・鹿野琢見



『日経アーキテクチュア (N.A)』主催「立原道造賞」の創設

立原道造賞の誕生

この度立原道造賞が誕生することになった。若手の建築家の設計アイデアに対する賞である。

鈴木 博之

毎年『日経アーキテクチュア』誌が行なっている建築設計コンクールに、今年から応募者のなかで二〇代の応募作品中の最高作に対して立原道造賞が設定されたのである。詩人として知られる立原道造が、職業として建築家の道を歩んでいたことはよく知られているし、その才能が同時代のひとびとに比べても、現在のわれわれにとっても注目すべきものであったこともまた、よく知られている。若くして死んだ立原には、実際の作品は多く残されていない。今回、設計アイデア募集の企画のなかに彼の名を冠した賞が生まれた

ことは誠に喜ばしい。

建築設計に関係する賞にはいくつもの種類がある。ひとつは建築を建てる際にその案を募り、応募案のなかから最も優れたものを選び出し、それを実際に建てることにするというものである。東京都庁舎や京都の国際会議場など、こうした競技設計によって設計者とその設計案が決定された例は多い。

それに対して、実際に建てる建物ではなく、課題を設定して自由に設計案を募集するという建築設計賞もある。アイデア・コンペと称されることのある競技設計である。これはあくまでも建築に対する理念やイメージを提出するものなので、自由度が大きい。

これ以外にも建築賞には、実際に建てられた作品に対して贈られるものもある。設計の考え方、施工の優秀さ、使われ方の評価など、様々な観点から建築を評価して賞を与えるのである。作品賞と

呼ばれるのがこのタイプである。

立原道造は若くして世を去ったから、実際の作品は余りない。アイデアの断片だけを残して死んでいった。したがって立原の名を冠した建築賞は、実際の作品に対して贈られるものより、建築に対する理念やイメージを示した設計案に関するものがよいと考えられたのであろう。彼自身、大学での設計課題の成果に対して何度も辰野賞という優秀賞をもらっているのだから、こうした設計案に対する賞にこの名が冠されることに満足するのではないか。『日経アーキテクチュア』誌とその発行元である日経B.P社が下した決断は、多に評価されるべきであらう。

そもそも建築賞に建築家個人の名を冠したものはそれほど多くない。大学の建築学科で卒業設計の優秀作に対して、その学校の偉大な先輩の名を冠した賞を出している例はあるが、それ以外にはあまりそうした賞は存在しない。

外にはあまりそうした賞は存在しない。実際に建てられた建築に対して贈られる村野藤吾賞、吉田五十八賞が知られるが、吉田賞の方はいまは無い。ちなみにこの二人は、ともに文化勲章を受けた建築家である。正確に調べてみたわけではないが、これ以外に建築家の名前がついた建築賞は思い浮かばない。立原道造がこうした建築家と並んで、新しい賞の名前になったことは、考えてみれば大変なことである。

立原道造を知る若い建築家がどれほどいるのか危ぶむひともいるが、今年から彼の名が若い建築家たちにも浸透し、彼の多くの活動が知られるようになるなら、これほど嬉しいことはない。立原が建築家として知られる度合いと、詩人として知られる度合いとのバランスが今後どうなるか、興味をもって見てゆきたい。

(すずき・ひろゆき 東大教授)

第三十四号 目次

- 『日経アーキテクチュア (N.A)』主催「立原道造賞」の創設
立原道造賞の誕生
若い建築家へ早世の天才の名を冠した賞を
鈴木 博之
佐野 正人
- * 特集
「立原道造生誕九〇年・没後六五年・開館七周年」に寄せて―その六―
もう一ど立原道造のバステル画のこと
窪島誠一郎
吉田加南子
- * 葉の波
光の波
吉田加南子
- 詩集の彩り 風信子追録
配島 巨
- 夏季企画展
「立原道造が綴った真情」のご案内・主な出展リスト
宮本 則子
- 後記・秋季企画展予告

若い建築家へ

早世の天才の名を冠した賞を

NA「立原道造賞」創設

佐野 正人

立原道造は詩人にして建築家。めくめるめくような才能を惜しまれつつ、一九三九年(昭和十四年)、結核のためにわずか二十四歳で他界。詩集『萱草に寄す』『暁と夕の詩』らの文学作品と、多くの建築図面を遺した。

この詩人・建築家の名を冠した賞を日経アーキテクチュア(NA)主催で創設することになった。日経BPP社の数ある賞のなかでも個人名の賞は初めてらしい。

着想だけでは終わらなかつた

ところが申し訳ないことに、初物だからといって、このコラムにふさわしい内幕話はどこにもない。立原道造賞創設の発端からして、この詩人に対する私個人の素朴な思い入れである。角川書店版の『立原道造詩集』を購入したのが二十歳の時。ほとぼしる感性と自分の狂いもない構成の美しさが好きで、この詩人が天才的な建築家でもあったことが納得できた。

「立原道造賞」を若い建築家のために設けたら、きっと彼らの励みになる。

そう思い始めたのは昨年三月に私が建設局長に就いてから間もなくのことだった。しかしそれは漠然と、あくまでも漠然とした思いである。個人の思い入れと会社の事業とを一緒くたにはできないくらい別の私にもある。それに、これほどの詩人なら、すでにどこかが賞を設けているはずだ……。

立原道造賞が私の中で再燃したのは、彼の遺作図面「ヒアシンスハウス」が建築家など千人近い熱心なファンで、さいたま市別所沼畔に具現したとのNA新年号の巻頭コラムを目にしたからだ。やはり、ただの建築家ではない。建築の世界における立原道造の偶像的な人気を再認識した思いだった。これならいける、若い建築家の目標たりうる。来年四月に迎えるNA創刊三十周年の格好の記念碑ともなる。

若手と、BPP社、NAを育てる

取材した記者から「立原道造記念館」の存在を知った。立原関係の資料の収集、展示、研究のほか外部との交渉事の窓口になっているとのことである。

思い切つて記念館に電話をしたら、館長代理の宮本則子さんから好意的な反応をいただいた。「私どもの知る限り立原道造賞はありません。日経BPP社さんが建築の分野で創つてくださったなら、素晴らしいお話です。」と。

平島編集長以下NAのスタッフに相談すると「いいんじゃないですか」。経営企画担当の大輝副社長(当時)も「まあ、やってもらえば」。あとは一気呵成である。

こちらは平島編集長、記念館側が顧問の鈴木博之東大大学院教授(建築史)を立てての交渉はきわめて友好的だった。条件らしい条件といえば、こちらは立原道造の業績と名声を最大限に尊重する、記念館側は建築の分野においてBPP社以外に立原道造賞の創設に同意しない、の二点だけである。

立原道造賞は、NAが二〇〇三年から実施している建築設計アイデアコンペの作品応募者のうち、二十歳代の若手建築家に与える最高賞とすることにした。今の願いは、私のしたことがただの個人趣味で終わってほしくない、ということである。立原道造賞の創設でBPP社と社会とのつながりがより広がり、NA誌の品格がさらに高まることを願う。建設局の諸君はそれに恥じない一層の研鑽を積んでほしい。

今年のコンペの審査員は、著名建築家の隈研吾氏にお願いすることになった。九月から応募作品を受け付け、十一月月上旬に審査、中旬に表彰式という日程は固まっている。どんな若者が最初の受賞者になるのか、今から楽しみだ。

(さの・まさと) 日経BPP社建設局長

『日経アーキテクチュア』誌と
同誌「アイデアコンペ」紹介
「日経アーキテクチュア」は建築の第一線で活躍される皆様のための専門情報誌。「仕事に直接役立つ実用情報」にとどまらず、「建築の面白さ」や「建築と社会の関係」も取り上げています。

同誌が開催する建築設計コンクール「日経アーキテクチュア・アイデアコンペ」は賞金総額200万円。課題設定や審査基準の切り口を鮮明にするために、毎回一人の審査員が作品の選定を行います。今回の審査員は隈研吾氏(隈研吾都市建築設計事務所、慶應義塾大学教授)。課題は同誌7月11日号で告知予定です。さらに今年から若手建築家を対象とした「立原道造賞」を新たに創設します。ふるってご応募ください。

プロフェッショナルが選ぶ建築情報誌

日経アーキテクチュア
NIKKEI ARCHITECTURE



2005年7月より
若手建築家を称える
設計コンクール
「立原道造賞」
創設 決定!

■購読料金(税込み)1年(26冊)18,000円(78冊)39,000円
■個人の年間予約購読・直送制 ■隔週月曜日発行(年26冊)
■A4変型判・毎号約130頁 ■発行:日経BPP社

年間購読のお申し込み、お問い合わせは 電話 ☎ 0120-21-0546 ☎ 03-5696-6000 URL <http://kenplatz.nikkeibp.co.jp/NA/>